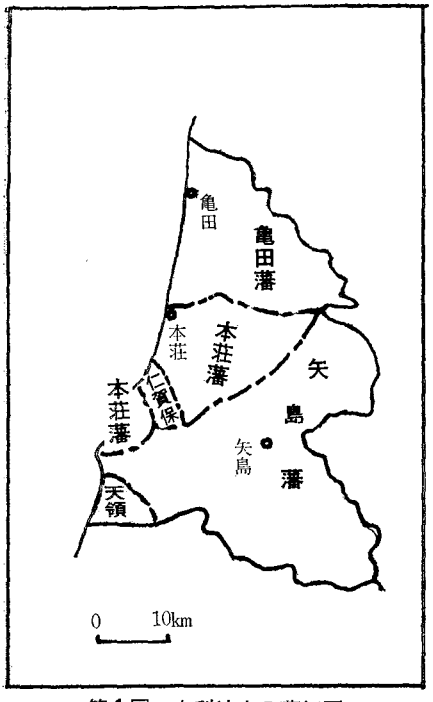
資料

矢島藩・本荘藩・亀田藩の新田開発

三浦鉄郎

一、本研究の課題



第1図　由利地方の藩領図

秋田県由利地方は一六二三（元和九）年から一六四〇（寛永一七）年までの間に、六郷氏（本荘藩二万石）、生駒氏（矢島藩一万石）、岩城氏（亀田藩二万石）、仁賀保氏（一万石）、天領（一、九〇〇石）の諸氏が入部し、小藩分割支配体制を完了した。本研究の課題は、このような小藩における新田開発の性格を開発経過や、開発の地域構造を通して明かにしたいと考える（第1図参照）。

二、新田開発の経過

(一) 矢島藩（第1表参照）

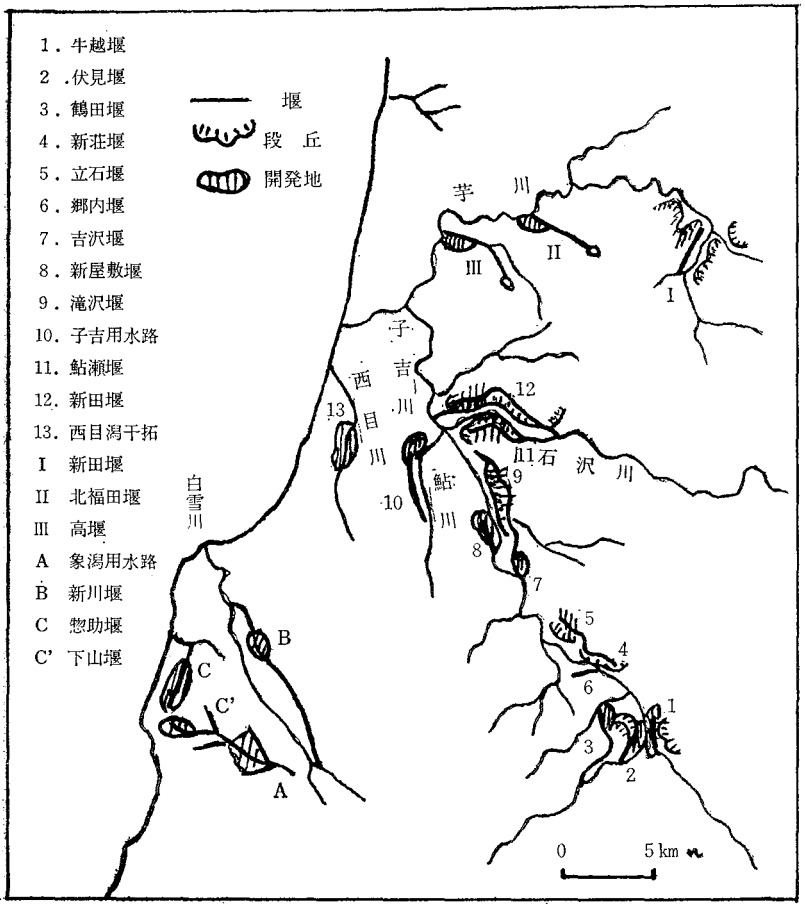
矢島藩が新田開発に力を注いだ地域は、子吉川の上、中流地域の狭長な谷底平野である。一六〇二（慶長七）年、仁賀保兵庫頭が常陸国武田に国替となり、最上義光の所領となった。一六〇五（慶長九）年～一六二一（元和七）年までは、最上氏の旗下楯岡長門守の知行となり、一六二二（元和八）年からは、上野介正純の所領となったが、これは僅か一カ年で仙北郡大沢へ移ったので、一六二三（元和九）年から打越左近の所領となった。さらに一六三〇（寛永七）年に生駒高俊（一万石）が「高は両沢目・本郷、大須郷五千三百六拾石八斗二升四合と仁賀保の内四千六百三拾九石一斗七升六合を併せて……」入部して支配した①。

新田開発は打越左近の一六二三（元和九）年からはじめられ、一六四〇（寛永一七）年以来一六四六（正保三）年までの七カ年間に元高一万石に対して一千百五拾七石の新田が開発され、その率は一一・五七％を示し、一六四六（正保三）年から一六五九（万治二）年の一三カ年間に元高に対して八・二〇％の新田率となっている。また一六五九（万治二）年から一六七六（延宝四）年までの一六年間に五・一五％の新田率となっているから、万治二年以後も順調に

第1表　矢島藩の石高

年度	元高	新田高	新田率
	石	石	%
1640（寛永17）	10,000		
1646（正保3）	10,000	1,157,000	11.57
1659（万治2）	11,157	917,313	8.20
1676（延宝4）	12,074,313	723,964	5.15

（生駒老岐守出羽国由利郡之内知行高帳による—秋田県庁蔵）



第2図　由利地方の用水路と開発

行なわれたことを意味する。

次に新田開発の主脈をなす用水路②③の開さくについて述べよう(第2図参照)。

㊀ **牛越堰**

団野吉太夫と菅原覚左衛門によって、開さくされた水路で、子吉川の一支流笹子川の標高一四〇メートルの地点から分水し、川の屈曲に沿って第一段丘崖下を通し、牛越部落下方において鳥海川に合流させ、第三段丘面の水田化に成功した。

㊁ **伏見堰**

鳥海川の標高一一〇メートルの地点から取水し、段丘末

端を通って、伏見部落に達している水路で、四段丘のうち第二、第三の段丘上に開田された。

㊂ 鶴田堰

鳥海川の谷の西方山麓高度二二〇メートルの地点における湧水（才ノ神部落付近）より取水し、山麓線沿いに沢渡向部落付近にいたる水路で、これによって第一段丘面が水田化された。

㊃ 新荘堰

新荘部落付近の標高一〇〇メートルの地点から、東方より流下する渓流に取入口を設け、山麓線に沿うて下新荘部落付近にいたる水路で、これにより上・下両新荘部落の立地する第一段丘面の水田化が促進された。

㊄ 立石堰

笹子川の標高九〇メートルの地点から取水し、山麓線や段丘末端を通って、立石部落に達する水路で、第三段丘面の開田と第二段丘面上の八ツ杉部落の成立を促した。

㊅ 郷内堰

子吉川の標高八〇〇メートルの地点から分水し、郷内、新所、新町などの部落にいたる水路で、これにより新所付近の第一段丘面と新町付近の第二段丘面の水田化がなされ、新所、新町の両部落成立の要因となった。

㊆ 吉沢堰

子吉川右岸の名高山（一九五・八メートル）の山麓で子吉川から分水し、山本部落付近に達する水路である。これによって新上条部落付近の沖積原が開発された。

㊇ 新屋敷堰

山本部落付近で子吉川左岸に取水口を設け、新屋敷部落を通過し、神田部落にいたる水路で、新屋敷部落付近の沖積原の開発と新屋敷部落の成立を促した。

㈨　滝沢堰

山本部落付近で、子吉川右岸から分水し、山麓沿いに前郷部落まで通ずる水路で一六八七（貞享四）年に開さくされ、前郷部落付近の段丘面が開発された。その後水害と耕地拡張にともない、一七二三（享保八）年に堤を築造している。このほか新田開発について④矢島史談によれば、一六二三（元和九）年に小助川太兵工が笹子村のうち、天神村の開発を行ない、金子三介は前郷内の谷地沢村と平林村を開き、弥左衛門は中村を、遠藤清兵衛は斉ノ神村を開発した。これらの用水路開さくと相まって新田集落の成立をみたであろうが、第2表は一六四六（正保三）年出羽国由理郡之内村高帳に新田集落としてかかげられている集落で、この頃までには新田集落が出揃ったものと考えられる

第2表　矢島藩領の新田集落

集落名	当高 石	斗	升	合
新所村	268	5	9	2
新町村		?		
新屋敷村		?		
金ケ沢村	18	8	4	7
牛越村	8	2	8	6
平根村	73	8	3	1
平林村	126	5	9	5
天神村	130	1	0	9
才ノ神村	66	0	5	4
高野ケ平村		9	3	1
法内村	60	9	4	1
館野村	190	6	4	3
谷地沢村	9	2	6	7

正保3年　出羽国由理郡之内村高帳（県庁蔵）

㈡　本荘藩

本荘藩は子吉川の下流における氾濫原と海岸の砂丘地域と金浦塩越の両港を中心とする沿岸漁業地域および鳥海火山西斜面を領内にもち、一六二三（元和九）年六郷政乗が常陸国府中一万石から本荘二万石に封ぜられて、金浦、塩越が藩財政の重要なポイントであったであろうが、子吉川中下流の地は水田が非常に多く、藩財政は一に水田耕作をして米産に依存していたものと思われる。新田開発が積極的に行なわれたことも第3表に示す通りである。

第3表　本荘藩の石高

年　度	元　　高	新田高	新田率
1623（元和9）	石 20,421,520		
1696（元禄11）	20,421,520	石 5,724,512	28.02%
1798（寛政10）	26,146,032	5,445,917	20.82%
1871（明治4）	31,591,949	143,000	0.45%

（秋田県史・資料・近世下による）

六郷氏入部当時二万四百二拾一石五斗二升であったものが、一六九六（元禄一一）年に新田五千七百二拾四石五斗一升二合を含めて、二万六千百四拾六石三升二合となり、新田率二八・〇二%である。一八九八（寛政一〇）年の「領内本田、新田高改」によると、三万一千五百九拾一石九斗四升九合となっているから、一六九六（元禄一一）年以降五千四百四拾五石九斗一升七合の新田開発がなされたことになり、その新田率は二〇・八二%である[5]。一八世紀が新田開発のピークであったのであろう。

次に新田開発を裏付けする用水路[6]と西目潟干拓[7]について述べよう（第2図参照）。

㈠　子吉用水路

標高三九三・三メートルの南由利原より北流する鮎川の中流堰口部落付近から分水して、町村部落に達するもので、堰口部落以北の谷地域と町村部落付近の沖積原の開田を目的とした。

㈡　鮎瀬堰

子吉川支流石沢川の下流左岸標高四五メートルの地点から取水し、山麓沿いに鳥川部落まで達している堰で、鳥川部落付近の自然堤防の背後の湿地を開田することを目的とした。

㈢　新田堰

虚空蔵山（三五八・一メートル）麓の鳥田目部落付近で、石沢川から分水し、右岸の山麓沿いに新田部落付近にい

たる水路で、鮎瀬堰と同様自然堤防の後背の湿地を開田するために開さくされ、新田部落は自然堤防上に立地している。

㊹ 西目潟の干拓

西目潟は本荘市から南方約八キロメートルの地点にあって、海岸砂立と西田利原（標高二二一・五メートル）との間に存在する潟湖であって、かつては一〇〇町歩の面積を有していた。

西目潟の干拓（水田化）事業は、町人請負新田として一八一四（文化一一）年に潟保部落の百姓重佐衛門が、本荘藩の計可を得て、藩士郡奉行淵名孫三郎の計いで本荘古雪町の豪商鈴木七郎右衛門の出資により潟の北方にある潟端部落付近に排水口を設け、標高五二メートルの砂丘と標高四七メートルの丘陵（砂岩及び礫岩から構成）間の低地を利用して排水溝を開さくし、海士剝部落付近で海へ排水した。この排水溝は現在の西目川にあたる。すなわち干拓の第一歩として水路をつくっても飛砂による埋没が考えられるため、これを防止するのに、ねむノ木、若松ぐみノ木などを植え、また氷雪を利用して土砂を運搬し、長さ一・一キロメートルに二列の土盛をし、翌春氷雪が融解すると左右が堤防のようになり、その中間を深く掘って河道として排水を完了し、九六町一反五畝の開田を行なった。重佐衛門は、その功により藩から毎年廩米一〇八石当を給与された。

㊺ 象潟用水路

この用水路は一五六九（永禄一二）年に開さくされ、水源を鳥越川の標高二八〇メートルの地点に求め、火山斜面を利用して長岡部落付近に達せしめ、長岡部落の西方で深田堰（北側）、中の堰（中央）、下山堰（南側）の三本に分流され、三本堰と呼称されている。

深田堰と中の堰による開田地区は、長岡部落から上孤森部落にいたる道路の北方高度一四〇～一五五　間の緩斜面で、下山堰による開田地区は前述の道路の南方長坂部落付近の高度一三〇～一八〇メートル間の中横地区である。

この地域は雪解水と湧水による冷水灌漑が行なわれ盛夏ですら水温が一〇度Cを記録する状態で上郷村は冷水害に悩まされてきた。収穫は青米や屑米などで反当一石五斗位であった。現在は三本堰の上流地区舟岡、水岡両部落間に小滝温水路、象潟温水路、長岡温水路、水岡温水路、大森温水路が完工し、水温も一八～二四度Cに上昇するようになり、反当二石五斗の増収となった⑧。

㈥　新川堰

伊勢居地部落は鳥海火山北西麓白雪川の中流高度六〇～七〇メートル間に立地し、この地は一八五五（安政二）年～一八七〇（明治三）年の間生駒家宰で伊勢居地の代官をつとめていた池田吉兵衛が桂坂の渓流（火山の伏流水）から取水して新川堰を開いて新田の開発をした。

㈦　惣助堰

象潟の潟湖は一八〇四（文化元）年六月四日の鳥海地震により地盤が隆起し、海と鳥海山北側裾野に幅の狭い海抜五メートルの低平な象潟低地を形成した⑨。

この地方の開発は百姓惣助によってはじめられた。すなわち一六五一（慶安四）年に輻射谷赤石川の中流部から取水し、前川部落の西方を通し、南西に向って一直線状に水路を開さくし、もって天神沼西方の原野六〇町歩を開いた⑩。その後一八〇四（文化元）年六月の大地震によって平地化した象潟（蚶潟）が年々葭茅の茂生するのをみて、

第4表　本荘藩領の新田集落

集落名	当高 石	斗	升	合	成立年代
冬師村	24	6	4	8	寛永3年
釜ケ台村	68	6	7	8	寛文6年
市之沢村			9	9	寛文6年
古雪中島	2	0	4	1	寛文3年

元禄11年5月15日　出羽国由理郡之内村高帳（県庁蔵）

塩越村の百姓伝作が城下の豪商近江屋治郎右衛門の出資と自己資金をもって一八〇九（文化六）年までに四七町歩余を開田した。このうち蚶満寺に四町四反三畝余、塩越役所、役付足軽、塩越村名主その他開田世話のものなどへ三町六反余が与えられた⑪⑫。

また伝作が海岸に防砂林を植え、赤石谷地の開田にも成功し、千刈余を得た。伝作はその功により藩から玄米二人扶持を与えられた⑬。出羽国由理郡之村高帳（第4表）によると冬師、釜ケ台、市之沢、古雪中島の四新田集落があげられているが、その他にもあったと思うが、大体において新田集落は、近世中期頃までに成立したものと考えられる。

㈢　亀田藩

本藩領は主として出羽山地と子吉川の支流芋川の狭長な谷地域とから成り、新田開発は芋川流域を中心に行なわれた。

一六二九（寛永六）年佐竹宣隆が封ぜられた際の石高は、第5表によると、二万三拾三石七斗九合で、この納入米は一万三千二百二拾二石二斗四升七合九勺四才であった。このうち蔵入として七千三百六拾三石四斗二升七合九勺五才であった。家士への扶持米は五千八百五拾八石八斗二升で、二万石といっても実高は少ない⑭。岩城の拾八万石から二万石に減封された財政困難の打開策が新田政策となったことは否定し得ない。

第6表によって新田率をみると、約五〇年間に三四・二%に達し、その後何等の進展をも示していないことは、開

第5表　亀田藩における石高

年　度	石　高	納　米	蔵　入	家中知行分
1629（寛永6）	石 20,033,709	石 13,222,247.94	石 7,363,427.94	5,858.82
1664（寛文4）	24,168,894 △4,135,185	15,951,474		
1673（延宝元）	26,914,266.4 △2,745,372.4	17,763,415.82	8,124,575.82	9,638.84

△ 新田分（秋田小川文書による）

第6表　亀田藩の新田率

年　度	本　田	新　田	新田率
1623（元和9）	石 20,033	石	
1664（寛文4）	20,033	4,135	20.6%
1673（延宝元）	20,033	6,880	34.2
1718（享保3）	20,033	6,880	34.2
1745（延享2）	20,033	6,280	34.2

（半田市太郎：秋田の歴史より）

発の限界に達したことを意味している。このように開発が僅か半世紀間に限界に達するだけ急テンポに行なわれたということは「第二代重隆公御成長被遊候而寛文四年までに御領内開き新田被仰付……⑯」で、初代宣隆の新田政策が強行されたことがうかがえる。次に用水路をみると)第2図参照)。

㈠　**新田堰**

芋川上流の代内部落の高度一〇〇メートル地点の渓流から取水し、山麓沿いに新田部落付近まで達する水路で、肝煎吉野平兵衛によって開さくされ、芋川左岸の第二段丘面の水田化と新田部落の成立を促した⑯。また肝煎岡田藤九郎は同渓谷の川大内郷の段丘面一〇町歩を開田し、岩野目沢部落を建設した⑰。

㈡　**北福田堰**

本堰は芋川の中流部に位し、芋川の東部薬師山（標高三七一・九メートル）の渓谷大倉沢から引水し、金崎、向徳沢両部落を通過して北福田部落に至る水路で、これが開さくによって北福田部落付近の氾濫原の自然堤防の後背の湿地を開発した。

㈢　高　堰

南内越村の高野利兵衛[18]が亀田藩の許可を得て、一七一六～一七三五（享保年間）年に山田部落内の沢に溜池を構築し、これより六〇〇間の溝を掘り、畑谷部落の字利野に二四町歩を開田した。このほか一六六六（寛文六）年～一六九三（元禄六）年間に肝煎浅野甚兵衛が、大正寺村向野に一三町六反七畝余を開拓し、一七九五（寛政七）年～一八一一（文化八）年間に大正寺村繋に一三町二畝余を肝煎工藤要左衛門が開いた[19]。

正保三年五月二十八日の出羽国油利郡内高目録[20]（岩城但馬守領分）に添畑村・中館村・赤田村・中ノ目村・加賀沢村・葛岡村・中田代村・長坂村・須山村・見釘村・滝村・下黒川村・大谷村・下虻田村・岩谷町村・増川村・荒谷村・大野村の新田集落が記載されている。

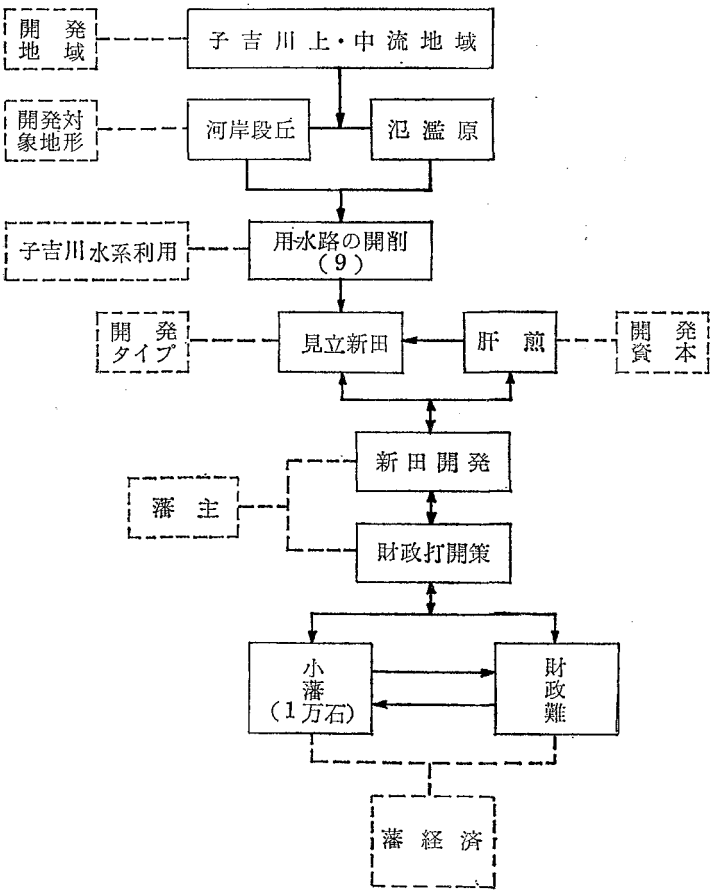
三、各藩の新田開発の地域的構造

本項では新田開発の地域的性格を明かにすることを前提に各藩の開発の地域構造を検討する。

㈠　矢島藩

矢島藩領の大部分は、鳥海山地によって占められ、僅かに耕地として利用し得るところは狭長な子吉川の谷平野が存するのみである。この谷平野こそが本藩唯一の財源地域として新田開発が施行された。

第3図によって、開発構造をみると、自然堤防の後背の湿地と河岸段丘の開発を目的に、用水路は子吉川水系を利用し、上流部では支流に、中流部では本流にそれぞれ取入口を設け、その数九本に及んでいる。このように開田可能な範囲内において、急ピッチに開発が進められたことは、下流地域を除く一円支配の結果にほかならない。しかして

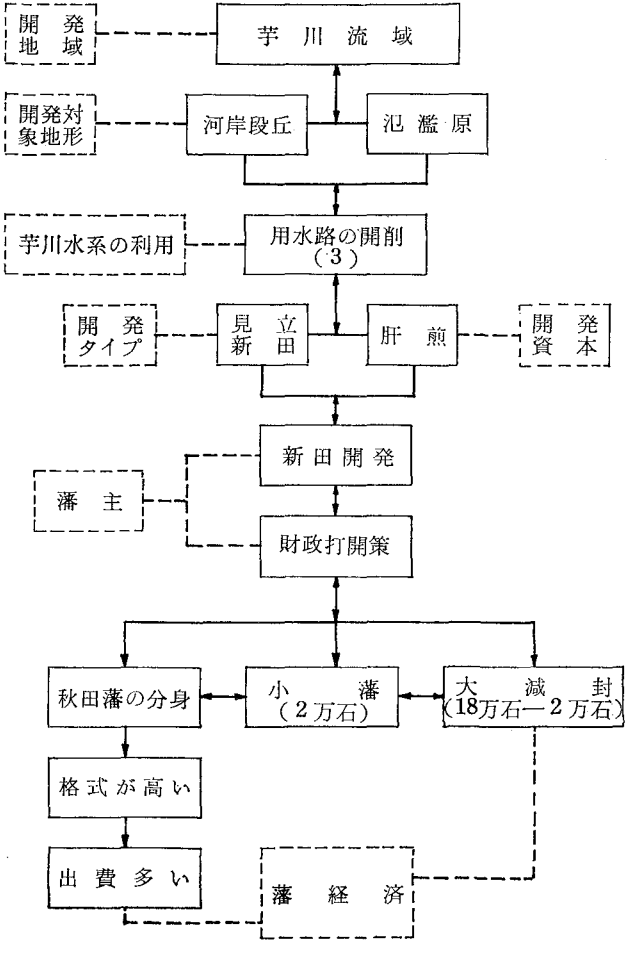


第3図　矢島藩の新田開発の地域構造

その開発タイプは、肝煎による見立新田が主となっているのは、藩経済からして、一万石の小藩である生駒氏の財政策と解される。

(二) **亀田藩**（第4図参照）

当藩領の大部分が山地で、唯一の農耕地として芋川の流域を有することは矢島藩とよく似ている。したがって、開発の主体が芋川の流域におかれ、矢島藩と同様に自然堤防の後背の湿地と河岸段丘が開発の対象とされた。用水路が三本開さくされ、取水口を芋川水系に求め、土地の狭少なこ



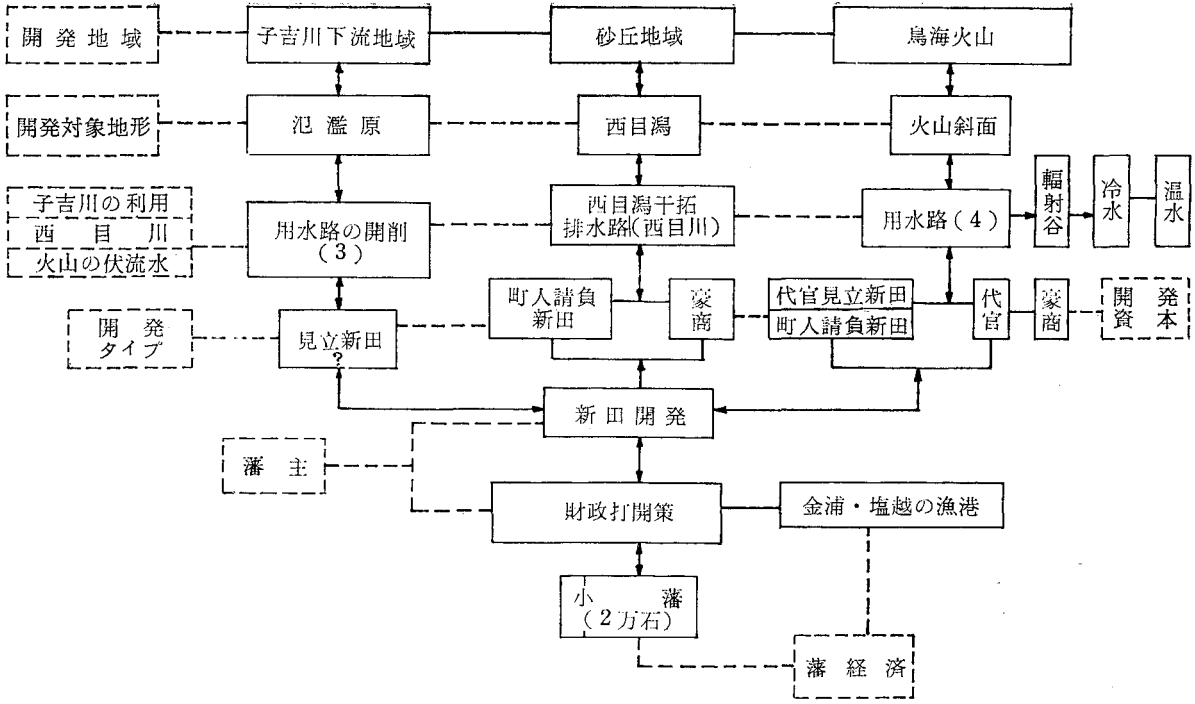
第4図　亀田藩の新田開発の地域構造

ともあろうが、五〇年間にして開発の限界に達するほど急テンポであったことは、一円支配と財政打開策のあらわれとみられる。

開発タイプも肝煎を中心とする見立新田の多いことは、岩城氏が大減封されたことや、秋田藩の分身という格式維持の経済情勢のしからしめたことである。

㈢　本荘藩（第5図参照）

当藩で耕地化の対象となったところは、子吉川下流の氾濫原と海岸砂丘の内側、鳥海火山斜面（アスピーテ）とであった。



第5図　本荘藩の新田開発の地域構造

(1) 子吉川下流の氾濫原では、自然堤防の後背の湿地を開発するため、鮎川や、石沢川から分水して、用水路を開さくし、(2) 海岸砂丘の内側においては、西目川の排水溝をつくり、西目潟の干拓をなし、(3) 鳥海火山斜面にあっては、輻射谷を利用した用水路によって、火山斜面と象潟低地とを開発した。しかしてこれらの開発タイプは、町人請負新田か代官見立新田となっていることは、金浦、塩越の漁港などがあるにせよ、二万石の六郷氏にとっては、藩経済を支える程のものではなかったから、藩が直接出資しない形の様式をとったことは当然であったろう。

要は前二藩の単一地域と異なり、氾濫原・潟湖・火山斜面などの自然環境と藩経済の打開策とによって、それぞれの地形に対応した方法を施行した。

四、新田開発の地域的性格—結論にかえて

矢島藩・亀田藩・本荘藩の新田開発の経過と地域的構造について述べたが、終りに、同一支配下における地域として、藩毎の地域的性格を纒めよう。

(一) 矢島藩

子吉川上・中流地域の狭長な谷平野に発達した河岸段丘と氾濫原の開発に主点がおかれ、一万石の小藩であるということからの財政策としての新田開発で、一六二三年打越氏が入部後実施され、用水路の数も多く、一六四六年をピークに順調に進められた。

(二) 亀田藩

芋川流域の河岸段丘や、氾濫原に開発の主点があったことは、矢島藩に似ている。なお岩城の一八万石から亀田の

二万石に大減封され、その上秋田藩の分身という格式上のことや、蔵入米の三分ノ二近い高が、家中の知行分となった財政打開策であった。

㈢ 本荘藩

子吉川中・下流地域と鳥海火山西斜面と潟湖の干拓を目的に開発が進められ、特に、火山斜面は、今日温水路地域として秋田県を特色づけている。前二藩同様小藩であって、金浦・塩越の漁業地域をもつとしても、水田開発に財政基盤をおいたことは変りがない。

なお開発様式については、各藩とも財政難を反映して個人資本を主とした見立新田や、町人請負新田となっている。

この研究は、文部省科学研究費によることを付記する。また本稿をまとめるに当り、つねにご指導を仰いでいる田中啓爾博士、青野壽郎博士、花井重次博士、浅香幸雄博士に深謝する次第である。

参考文献

① 土田誠一　矢島史談
② 阿部竜夫　我等の郷土由利の面影
③ 矢島町教育委員会での聴取
④ 前掲(1)
⑤ 秋田県　秋田県史第三巻近世編下
⑥ 本荘市教育委員会での聴取
⑦ 吉田東伍　大日本地名辞書　出羽国

⑧ 工藤吉治郎　秋田県に於ける冷水灌漑の農業地理的研究
⑨ 中野尊正　日本の平野
⑩ 前掲(1)
⑪ 前掲(5)
⑫ 前掲(7)
⑬ 前掲(7)
⑭ 亀田町　亀田郷土史
⑮ 前掲(14)
⑯ 秋田師範学校秋田県総合郷土研究
⑰ 前掲(1)
⑱ 前掲(14)
⑲ 前掲(16)
⑳ 秋田県庁蔵